

1、国家権力犯罪を糺し、新たな運動を巻き起こす一助に

（「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件 総資料総目録」から抄録・再編）

本会は、憲法を戦争容認にすりかえる策動を許さない。

本会が告発する「スパイ冤罪事件」は、太平洋戦争の勃発と同時に、軍および軍国主義者に牛耳られた国家権力によって仕組まれた国家権力犯罪だった。

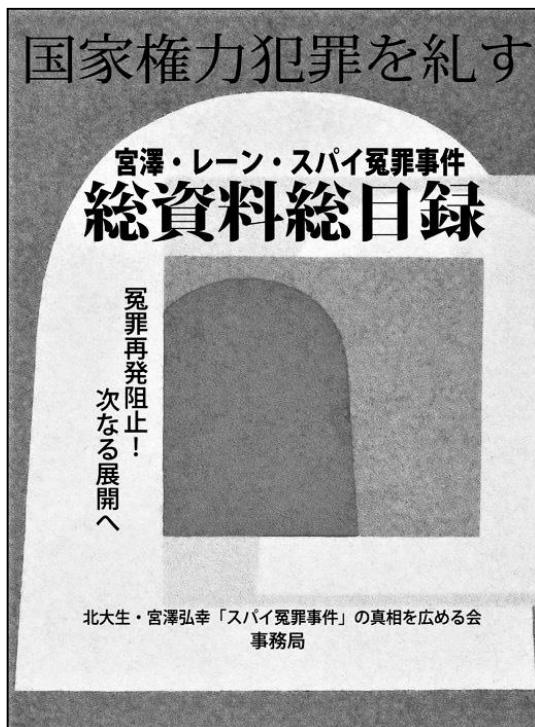
それゆえ当時も、軍権力が排除された戦後にまでも国家によって隠蔽され、歴史としてさえ抹殺される瀬戸際に瀕していた。

冤罪の根源は「軍機保護法」

瀬戸際から立つたのが、1980年代に起きた「国家秘密法」阻止の運動だった。この中で戦争を憎む一人の弁護士が隠蔽の壁を破り、これに触発された冤罪の遺族が声をあげ、共感の輪が広がって真相の究明に努め、関心を高くした。本件冤罪の根源は戦争法の一翼だった「軍機保護法」（敗戦後廃止）にあり、「国家秘密法」浮上はその再来だった。

したがつて本件冤罪の告発運動は、そのまま「スパイ防止法」阻止の運動と連動し、列島各地各層の戦争反対勢力を掘り起こした。運動は運動を呼んで連帶した力は国会を取り囲み、審議に持ち込まれていた「国家秘密法」を廃案に追い込み、再上程を阻止するに至った。策謀・策動の真相を衝き、熱い思いを結集すれば大きな力となることを立証したと言つてよい。

宮澤・レーン・スパイ冤罪事件が明らかにしたのは、国家権力による冤罪の狡猾さ、あくなき弾圧の残酷さ、そしてそれを徹底して隠蔽する悪辣さだった。国家は強引、野放図に犯し、そのうえ無かつたことにする。これら一連の国家犯罪を告発する「治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟」は、治安維持法体制下で弾圧された全ての人たちを視野に徹底調査を進めているが、権力によつ



て破棄・隠蔽された真実を掘り起こしていくのは容易ではない。

「責任者を特定、糾弾し国家賠償を」

それだけに、隠蔽を乗り越えて発掘された記録は重要な証拠となる。犠牲者一人ひとりの血肉であり、残酷無残極まりない真相の一端をみせつけてくれる。

また、これらの証拠は、国家権力による犯罪を徹底して暴き出し、責任者を特定して糾弾し、国家賠償をさせることがいよいよ必要であると、訴えている。

この視点に立つたとき、本会もなお一層、自らの課題に向けて思いを新たにせざるをえない。

「なぜ、宮澤弘幸とレーン夫妻だったのか」

「なぜ、かくも重刑だったのか」

「その罠をはめたのは誰なのか」

——である。

これは本会の発足1カ月後、最初に発刊した冊子『スパイ冤罪宮澤・レーン事件 真相を知つてほしい』の後書きで提起した一節でもあり、その再掲となる。

いま積年を経て、なお得心のいく答えを見出しえていない。もとより積年の間には新たな事実、新たな証言にも接し、それらによつて仮説をたて、推論を試みてはいるが、である。

伝えるに正確でなければならない

同時に、伝えるに正確でなければならない。正確に伝わつて当

然のことながら、なかなかそくなつてはくれない。

たとえばマスコミの多くはいまも本件冤罪の発端である12月8日の一斉検挙を「逮捕」と伝えている。「検挙」と「逮捕」は單に用語の違いに止まらず、事件を捉える本質に関わつてゐる。

本会が運動に連なつて5年。真相を究め、広めるに当り、その一端を担つてゐると自覺するが、大切な部分での誤用、誤解、半解が正し切れていないと痛感している。これも、この時期に『総資料総目録』をまとめるに至つた動機の一つであり、「正確に伝えたい」を本篇の最初に位置づけた所以である。

もう一つ、危険な誘いに、英雄化志向がある。事を広く伝えるにあたり、当事者の人物像を重ね合わせることになるが、ややもすると美化し、かえつて事を歪め当事者を貶める。

本件でも、拷問による自白強要が焦点となる中で、それが起きた。戦後になつて、宮澤弘幸の弁護人だった一人が、「(このまま拷問が続けば殺されるので) 形だけ容疑の概略を認め、公判で明らかにすればよいと勧めた……」との趣旨で述懐したのが孫引きされ、さらに野放図に拡大し、「宮澤弘幸は頑として自白を拒否した。この生命を賭して闘つた尊い生涯こそ受け継がれなければならない」となつて伝説化し、さらには自白拒否の姿勢が「天皇の忠良なる臣民であることを拒否する存在だ」と祀り上げられ、反天皇制の偶像に仕立て上げる論考までが現れるに至つた。

実際には、署名・指印付の自白調書が検察側証拠として法廷に出されている。ただし、弁護側はこれを「拷問による自供だ」として法廷で否定しており、その経緯が弁護側の上告趣意書の中に

記されている。(当時の司法環境では上告趣意書といえども拷問の事実を赤裸に記載することができず、極めて婉曲な表現になつているが、事実はしつかり読み解ける文脈になつていて)

拷問への対応、拷問による自白の有無は、真相を解明する上で重要な事実となるが、同時に、次元の異なる規範と絡めてはならない。拷問に耐え、拒否を貫くを以って是とし称賛すれば、屈して応ずるを以て非とし蔑むこととなり、ひいては同じ状況に嵌められる人に非情の苦痛と、死さえ強いることになる。

肝心なのは、拷問に走る国家権力のありようであり、権力の意思として拷問を決定し、実行する仕組みを解明し、糾弾し、再発を不可能にする仕組みを保障することだと考える。

愚直に我慢強く声を上げ行動を重ね続ける

翻つて、特定秘密保護法—安保法制—共謀罪法と角を曲がり続ける安倍政権との対峙において、闘いの質量を省み、果たして忸怩はなかつたか。あの1980年代に比べても、迫るほどの闘いを組織し得なかつたのはなぜなのか。

自らに返つてくる、この問いに正面から向き合い、改めて愚直に一步を踏み出すことが大事と考える。浮遊する無関心層と、戦後築いた平和の歴史を否定する分断層を、いかにして真っ当な議論の出来る場に引き戻すか、これも大事な課題となる。

(詳しくは本会編著・花伝社刊『引き裂かれた青春』)



2014年9月5日・刊

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会・編

花伝社



2013年2月22日・刊

北大生・宮澤弘幸
「スパイ冤罪事件」の
真相を広める会・編

2、北大「スペイ冤罪事件」の被害者

ハロルド・メシー・レーン 52歳 米国（アメリカ合衆国）籍 元

北海道帝国大学予科英語教師（年齢、国籍、職業は判決記載による）

1941年（昭和16）12月8日検挙、42年4月9日起訴、43年6月11日有罪確定（大審院）現・最高裁に相当、懲役15年。北海道内の刑務所に収監後、43年9月、相互の抑留者、帰国を希望する者らを交換する日米交換船で米国へ送還。

ポーリン・ローランド・システア・レーン 52歳 米国籍 元北海道帝国大学予科英語教師

1941年12月8日検挙、42年4月9日起訴、43年5月5日有罪確定（大審院）、懲役12年。北海道内の刑務所に収監後、43年9月、日米交換船で米国へ送還。

宮澤 弘幸 25歳 北海道帝国大学工学部学生

1941年12月8日検挙、42年4月9日起訴、43年5月27日有罪確定（大審院）、懲役15年。網走刑務所に収監、45年10月10日、連合国軍総司令部（GHQ）の覚書に基づき釈放。

渡邊 勝平 26歳 北海道帝国大学工学部助手

1941年12月8日検挙、42年4月9日起訴、同年12月19日有罪確定（札幌地裁）、懲役2年。

丸山 譲 29歳 会社員

1941年12月27日検挙、42年4月10日起訴、同年12月16日

有罪判決（札幌地裁、同確定で懲役2年）。

黒岩喜久雄 25歳 無職（検挙直前、北海道帝国大学農学部を戦時線上げ措置で卒業）

1941年12月27日検挙、42年4月10日起訴、同年12月24日有罪判決（札幌地裁、同確定で懲役2年、執行猶予5年）。

石上 茂子 元レーン家女中（内務省『外事系警察概況』記載）

1941年12月8日検挙、100日を超える勾留取り調べ後、42年3月10日「嫌疑なし」で釈放。

●レーン夫妻、宮澤弘幸の来歴

◇ハロルド・メシー・レーン

1892年（明治25）10月7日、米国中央部アイオワ州タマで生まれる。敬虔なクエーカー教徒として同教団建学のカレッジで学び、卒業論文は「チャーチズ・ディケンズと社会悪の改革」

◆1917年（大正6）4月、米国の第一次世界大戦（1914年開戦）参戦に際し、良心に基づく兵役拒否の制度を行使して徴兵を忌避し、教会後援の社会奉仕に従事。戦後、フランスの復興に往来り、その後、銀行員を経て、日本政府による大学教員公募を知つて来日。◆21年（大正10）8月20日、北海道帝国大学予科の英語教師として着任。この間、下宿したローランド家でポーリンと出会い、やがて結婚。長男夭折、後6人の娘の父となる。

◆ 41年（昭和16）12月8日、日米開戦。同時に、全国一斉検挙で拘束され、43年（昭和18）6月11日、大審院で有罪確定（懲役15年）。服役するも、43年9月、日米交換船で米国に送還。◆ 51年（昭和26）4月、北大有志の再招聘運動に応じて北大英語教師に復職。◆ 63年（昭和38）8月7日、医療事故により死去。札幌・円山墓地に眠る。

◇ボーリン・ローランド・システア・レーン

1892年（明治25）12月7日、京都生まれ。父は宣教師。

4歳から札幌で育ち、のち米国のカレッジで学び、この間、結婚して一女が生まれるが、夫は第一次世界大戦で戦死（病死との説もあるが出所不明で確証はない）。

◆ 1922年（大正11）5月、ハロルドと結婚。以後ハロルドの来歴と重なるが、日本語は母国語にまさる堪能で子供たちも日本語で育てた。北大のほか北海道学芸大学（現・北海道教育大学）や旧制中学などで英語を教え、多くの教え子に慕われた。

◆ 66年（昭和41）7月16日、死去。円山墓地で眠る。

◇宮澤弘幸

1919年（大正8）8月8日、東京・豊多摩郡代々幡（現・代々木あたり）生まれ。父・雄也（大手電線会社の幹部技師）母・とくの二男。山谷小学校、東京府立六中（現・新宿高校）を卒業。第一高等学校を目指すも受験に失敗し、目を北海道に向ける。

◆ 1937年（昭和12）4月、北海道帝国大学予科入学。文武

両道に励み、戦時下ながら青春を謳歌。「蟬山正道を囲む会」などに参加。「文武会」（全学学友会）理事。◆ 古典研究会、哲学研究会を組織。レーン夫妻、ドイツ語教師・ヘッカーラ外国人教師のもとにも積極的に通い、年上の交換留学生・フォスコ・マライニとも出会い、大きく目を広げるに貪欲だった。

◆ 39年（昭和14）6月、「心の会」（ソシエテ・ドゥ・クール）発足に参画。7月、樺太（現サハリン）で労働実習（海軍工事）。

◆ 40年（昭和15）4月、北大工学部電気工学科進学。国策会社・南満州鉄道募集の論文に応募し「大陸一貫鉄道論」で入選。7月、マライニと北海道中央部を自転車旅行。

◆ 41年（昭和16）4月、遠縁の高橋あや子と親しくなり、前後して海軍委託学生試験に合格し月45円の手当を支給されるなど、千葉県習志野の陸軍戦車学校で機械化訓練講習会に参加するなど、年来の軍国少年としての行動力も活発だった。◆ 41年12月7日、急病で入院中の高橋あや子を北大附属病院に見舞う。◆ 翌8日、日米開戦。全国一斉検挙でレーン夫妻らと共に軍機保護法違反容疑で拘束される。◆ 43年（昭和18）5月27日、大審院上告棄却され、懲役15年確定。網走刑務所に収監される。

◆ 45年（昭和20）10月10日、網走から移監された先の仙台刑務所から連合国軍総司令部（GHQ）の「政治的・市民的及び宗教的自由制限の除去に関する覚書」によつて釈放。◆ 47年（昭和22）2月22日、獄中の衰弱に加え結核に罹患して死去。獄を出てわずか1年5ヶ月の、事実上の獄死だった。無限の夢を開きながら、27歳6ヶ月の生涯となつた。東京新宿・常圓寺に眠る。